<table>
<thead>
<tr>
<th>タイトル</th>
<th>マックス・ウェーバーにおける《オイコス》の概念</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>弓削 達</td>
</tr>
<tr>
<td>資料</td>
<td>一橋論叢 34巻 6号 758-774</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>1955年12月1日</td>
</tr>
<tr>
<td>型式</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://doi.org/10.15057/4095">http://doi.org/10.15057/4095</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
マックス・ウェーバーにおけるヘオイコスムの概念

はじめにこの小稿を革新的な道をたどっておいた。この小稿は、ウェーバーにおけるヘオイコスムの概念をあらゆる方面から検討して、これを学説史的に考察した。「バーケー」の概念をあらゆる方面から検討して、これを学説史的に考察した。「バーケー」の概念をあらゆる方面から検討して、これを学説史的に考察した。
て、いわばその現代的意義といかわらせて考察されていくものである。このような論文の構成を無観にして、この論文に批判がまれることを考えるのでは、内田氏にたいして非常に失礼になると思う。しかも、ロストフツフツとウェーバーとの比較自体にいろいろな問題が含まれていて、との意味でこの小稿は内田氏の論文全般に疑問を拡のではない。だから、私があくまで考えているオイコスの解釈の若千点が理解できないと内田氏の論文全般の趣旨もかわり理解しにくいものになる、ということは言えるであろう。

さて、内田氏はウェーバーのオイコス概念を『経済と社会』のうちのカジスティックな概念規定だけで論ずるのでは不適で、古代社会経済史研究の具象的歴史的生への適用で考察すべきであるとされ、それを古代資本主義の典型性の発展をみたエクストーシスの中の問題とされる。まず『古代農業事情』の第一部の内容を検討してみる。ウェーバーが内田氏をダブリュ・ケトルなどに与えているオイコスの解釈の特質について、分業的協業の生産方法に基づいて作りあげられたのではないから、たとえば個人的経済や市場に個人的経済を要請に基づいて離れたのでなくて、経済に個人的経済関係に於て（オイコス）なされるものでもある。だからにかしら、ウェーバーが鰐河の古代資本主義の典型性においてこそ、その基本構造と特質とにおいてオイコス経済学をふとさせるが知られているが、鰐河氏はウェーバーのギルントヘルシュワフ（コノノト制）に於けるオイコス、略記してO・K（G）
都市共同体のいま一つの基礎構造として計り知れない歴史
都市共同体のいま一つの基礎構造として計り知れない歴史
都市共同体のいま一つの基礎構造として計り知れない歴史
内田氏は以下の考察に基づき、さきの \( G \rightarrow K \) の間を質差しない。ところが、のオイコスの組織構造が大規模化され、したがってオイコスが、その性格の点に到達したのである。このため、後の大叡制制に必然的に発展し得た。\( G \rightarrow K \) の二型を示し、\( G \rightarrow K \) に到達したのが、内田氏のオイコスの組織構造が大規模化されてきた時である。のオイコスの組織構造が大規模化されてきた時である。のオイコスの組織構造が大規模化されてきた時である。のオイコスの組織構造が大規模化されてきた時である。のオイコスの組織構造が大規模化されてきた時である。
疑問の第二点である。以上の疑問の内容を、以下において順次に説明させていただきたい。

第一点について。疑問の中心は、ウェーバーはクリエントをオイコスの実体的基礎として経済的役割において重視していたか、という点である。私がこの点を疑うのは、「古代農業事情」二〇九頁に「経済」と「社会」五九一二〇頁から、バートレッズによるクリエントの規則的な経済的利用がなかったか、という点にウェーバーの力があるように思うからである。前者においてウェーバーは、モノのクリエントを「自由なクリエント」として利用することを経済的、実際にはその反対のことがおこなわれたかもしれないという。クリエントを規則的な生産者とするということをウェーバーは規則的、経済的に見たところは明らかで、クリエントが規則的労働によって所得を賃金としているからではあるが、それは戦争における军政の規則的意義であることに考えられるのである。

第二点について。「自由なクリエント」にたいするウェーバーの論説は、古き封建のクリエントについてである。ウェーバーの論説は、大体以上のところであるとと思う。このよう、主にこのクリエントの実際的意義が主として経済的側面に存在しない、という意味は、古代資本主義発展期の「自由なクリエント」にいうことができる。
たると一般化する。『ウーバー』は見る（二六九九）
たると一般化する。『ウーバー』は見る（二六九九）
たると一般化する。『ウーバー』は見る（二六九九）
たると一般化する。『ウーバー』は見る（二六九九）
[日本語のテキストは、人工知能が理解することができません。]
第34巻 第6章

資本製造者事象とは、象牙輸入商であったデジヌスを事象の父が、かれから象牙を購入して刀銑を製造した様相に違いない、刀銑作業に於いて生じた労働の操作のスキルを、象牙にこれを付与して、象牙の価値を高めるという経験で、その結果、刀銑の市場価格を高めるという経験をなすのである。これにより、刀銑の製造者事象は刀銑作業を支える重要な役割を果たすことが必要であって、これがその事象の特徴である。

しかし、刀銑の製造者事象は刀銑作業を支える重要な役割を果たすことが必要であって、これがその事象の特徴である。
大本の論文の結論に於ては、内田氏の論文にたいして感じた
有する矛盾の第1点である。ウッペルの経済的諸特質にかんが
してはならないであろう。これが私の疑問であるが、こ
れは、ウッペルについて深く研究されている内田氏の
考えによるものである。内田氏の御教示をまって私の理解を内田氏の
それに確信していただきたいと願っている次第である。

この問題については『古代農業事情』ニニ六頁の論述
がウッペルの考えを端的にあらわっているものと考え
えるか否かを私に於て考察をくわえていているところであ
る。だいたいつぎのようになっている。農業制度
の確立、奴隷の雇用、田畑の耕作、家族経営（アネストーゲ
および農家が銀行に於ける農業の資本主義的利用を
有するようなら、あいにくに自由労働の奴隷労働
の効果をもたらす。とくに農業における資本主義的奴
隷労働に、さらに農業が安値な土地の存在を不欠の
前提とする。だから、一時的には戦争や革命による財

産業の結果とされるものであり、慢性的には肥沃な農業大田と訥の地は nowhere するものである。収穫を受ける収穫力のある都市の急燃発と併行したときに考えられるものである。それ以前の高度のように、工場の近代化をみると、

イタリア統一後および鉱業の勝利の短い期間に、地中海沿岸の都市が急速に工業化を遂げる。しかし、その過程において、都市国家の成長と資本主義の発達の段階は存在し、

古代の労働力の効率化、農業における資本主義的奴隷制における労働者の実態をもたらしたものは、特にヒマラヤ山脈の先進国が、

古代において、膨張期の共和政体（たとえば、

の発展こそが、後期の古典的帝国（ローマ帝国）における経済とは異なり、古い形式化されたものである。

この視点で、オイコスの発展の二種類を考察する。前者では、

突然間に思われる。この事実は、産業の近代性を示すものである。それらを結びつける元素の一つに、

の資源（産業）としての利用への移行についてふれてきたところであるが、それらが結びついている現象を、

や関係を意図されていなかったように思い知らされるのである。
ドイツとイギリスの社会的、経済的発展と家族共同体の形成に関する考察

一、家族共同体の形成と漸進的な経済の発展

家族共同体の形成とは、ある地域または社会において、家族が中心となって経済活動を行う組織体を指します。この組織体は、家族間の経済的・社会的関係に基づいて形成され、その発展は漸進的な過程を経て進むのが一般的です。

二、家族共同体の形態と経済活動

家族共同体の形態は、地域や社会の状況によって異なります。ある地方では、家族が共同で農業を行って生活を営むのにに対し、他の地方では、家族が別個で経済活動を行っています。家族共同体の経済活動は、家族の内訳、収入、支出、投資等のあらゆる面で大きく影響を受けるものであると同時に、家族共同体の形態を決定する要素としても機能しているため、ここでは、それらの要素を取り上げて考察を試みます。

三、家族共同体の経済活動とその発展

家族共同体の経済活動は、その形成と発展において重要な役割を果たしています。家族共同体の経済活動の発展は、地域社会の経済的発展を促進する一方で、家族共同体の内部においても、経済活動の発展が家族間の経済的関係を強化し、家族共同体の形態を形成する役割を果たしています。

以上のように、家族共同体の形成と発展は、地域社会の経済活動の発展と密接に関連しています。家族共同体の形態と経済活動の発展を理解することは、地域社会の経済の発展を理解するための鍵となると考えられます。
業化と１世紀をこえた家つきの労働

力の機構が、主人の財貨および兵役の労働にかんする経済的のみならず軍事的・宗教的な必要を充足するのであ
り、自己の土地すべての原料品を産出し、家つきの労
働力による自己的仕事場が他のすべての財貨を産出し
自個の給料を提供する。そして在住は、小さいのがその
臨時的な余剰の資本、自家生産にいかないものの中に
ためものである。これこそ、オリエントとくにエジプ
トの王の経済や、小さい規模では、オロク的な貴族
や王侯の経済が、すっかり抜けた状態であり、ペルシャ
王やフランス王国のどちらの宮廷計画がきわめて類似
するところの状態である。そしてまた、ローマ帝政時代
内のグレート・ヘリシャーは、財政の取引、都市、貨幣経
済の一般的な意味が増大するにつれて、まさに正反対の発
展傾向を示したのである。

やや長くなったが、以上のウェーパーの所論をもとに
考察して考えると、内田氏の解読されるようなオロク経済の
二類型でなく、家族共同体→資本主義経済→家族共
同体→オロクという二つの型が考えられるのは内
田氏のいわゆるOが古代のオロク経済よりも一段
と高い生産力発展の段階に合理性に高いオロク経済で
はない（私はウェーパーに生産力の念頭にあるのかどう
か、あとでさらにおきるつか、と問っている）。むしろオ
リエントとくにエジプトにみる典型的なオロクたるO
の発展をとげた中世の経済発展に述べたという内田氏の
ウェーパー解釈にいたって、当然疑わしいと思われる。

ウェーパーにおいて、家産制支配におけるオロ
コスと西洋古代末期の中世初期経済学における発展が、
いかなる理論の把握をもってとらえられているのか、この

マックス・ウェーパーにおけるオロクの概念
ねは私にはいままだ明かではないのである。

私はこの前に

かんして、ウェーバーにおいては「オイコス」が、ある。

かも奴隷制大制覇、資本主義、家産制、家父長制、官僚制、

合理主義、専制主義等々ともあい、

類型概念とし

て構成されているのであって

発展法則の一環として発展されているのでない、とい

うことを思い合すべきではないかと思う。

このことは、

ウェーバーにあっ

て、西略近代資本主義の特質と成立

す強化され、

多方面にわたるいわゆる社会学的諸研究

の要をなしていった事情と深い関連があると思われる。

それでは、問題意識の収斂が、ウェーバーのたれた諸概念

を示された上原式教授（社会発展の法則と類型）の

と、たる、

反対に、段階法則や

は、経験的現実の個々の類型への接近にある是それからの

反は、ウェーバーにおいて、あることが示されているのに

イコスの歴史の個体の関係で、新旧問題のなかにあら

たのであり、おおむねそれにによってウェーバーの学問、

の主要なものはウェーバーに即し、のべられた内田氏の、

の分岐に、母上げる高野オイコスから中世経済への発

展など、ウェーバーのたれたのべられた内田氏の、

ついた説明にあって、私そのものと理解した新たな把握の仕方を示

して問題については重要な形式をえられれば幸いである。

－九五－五二三－